

同朋大学佛教文化研究所紀要 第三十五号（二〇一六年三月） 抜刷

法隆寺における一切経事業の歴史的意義について

―史料的价值の在りかを考える―

藤井 由紀子

法隆寺における一切経事業の歴史的意義について

―史料の価値の在りかを考える

藤井 由紀子

はじめに

新しい史的研究は、新しい史料評価によってしか生まれない。歴史学の基本は文献史料に基づいて過去の歴史を復原することにあるが、現存する文献は限られているため、実際には史料批判という手続きのもと、信憑性が高いと判断された史料を補完的に用いることになる。しかし、その史料批判にしても、ややもすれば、各研究者が各自の関心に適った部分にのみ信憑性を認める、といった恣意的な状況を招きかねない。史料の信憑性や成立年代を問うことは確かに重要であるが、史料の真偽ばかりが問われてしまうと、そこから引き出される情報も、このように矮小化される危険性があるように思う。では、信憑性を問う以外に、史料の価値を広げることではできないのだろうか。本稿はこうした問題意識を

念頭に、法隆寺一切経を史料としてどう価値づけていくか、法隆寺関係の、その他の史料も含めて、改めて論じていくことを主な目的としている。

視座は大きくふたつある。ひとつは、平安時代末期という、古代から中世への移行期に注目することである。国の財源で運営されてきた古代の寺院が、社会の大きな変化に何度も直面しつつ、千年以上もの時間をどうやって生き残ってきたのか。本論で述べていくように、中興という言葉で表現されてきた寺院復興の内実を具体的に洗い出してみると、喜捨に結びつくような新たな信仰を作りだし、人々と寺院とをつないで、直接的な財源を確保しようとした工夫が、そこにはあったことがわかる。その意味で、寺院における信仰とは、新しい価値の創出であり、それを人々に享受させる仕組みの構築であった、とみることができる。法

隆寺の場合もまた、一切経が書写された期間と、法隆寺が中世にむけて大きく復興を遂げる時期とは重なっており、聖徳太子五百回忌を契機に、一切経だけでなく、これらが納入された聖霊院という堂舎が新たに寺内に創建された、その歴史的意義をこうした視座で考察し直してみる必要がある。^①

もうひとつは、昭和初期以降、同朋学園に所蔵されてきた法隆寺一切経を、史料として再評価することにある。そもそも当学園に法隆寺一切経が所蔵されていること自体、一般にあまり知られておらず、これまでに簡略な目録の形で紹介されているが、史料的な価値づけについてはむろん、その歴史的意義にもほとんど触れられてきてはいない。そこで、本稿では、法隆寺一切経を復興という視座から探っていくとともに、当学園所蔵の一切経をいかに史料として活用するか、その可能性を論じてみたい。なお、平成二十七年秋、仏教文化研究所では、そうした試みを手助けするツールとして、デジタルアーカイブスを立ち上げている(図表1)。そこで、まず以下では、法隆寺一切経研究に対するその有効性について本論で論ずる前に、このデジタルアーカイブスの簡略な概要について、少し言及しておきたいと思う。

このデジタルアーカイブスは、同朋大学の前身となった「**「蔵長屋」**」にちなんで、「**アーカイブス蔵**」と命名している。^② 研究者を対象とするだけでなく、一般の利用も想定した画像一体型データベースを中心にしたもので、当学所蔵の史料類や、研究所で過去に行ってきた寺院調査

の内容を、画像情報とテキスト情報を一体化させた形で管理し、再利用できるよう加工している。そして、今回、その最初のコンテンツ(内容物)として、法隆寺一切経十九点のデータベース化を試みたわけであるが、撮影や計測などの基礎的作業はむろん、データベースの設計も外部業者には委託せず、すべて研究所内で作成した。^③ ただし、デジタルアーカイブスの公開をめぐるのは、解決しなければならない問題が残されており、残念ながら、現在のところは、研究所内部でしか公開されていない。したがって、本稿でも、法隆寺一切経の書誌データの分析に基づいて論を展開する形はとらない。今回は、当該データベースによる一切経分析整理の可能性を提示するにとどめ、デジタルアーカイブスの立ち上げを通して同朋学園所蔵経の分析・整理に着手したこの機会に、過去の先行研究を改めて振り返り、その歴史的意義について再考の余地を探りたい、と考えている。^④



(図表1) 「アーカイブス蔵」トップページ

第一章 同朋学園大学部附属図書館蔵「法隆寺一切経」の概要

——同朋大学仏教文化研究所「デジタルアーカイブス事業」の企図との連携——

学校法人同朋学園には、現在、十九点の法隆寺一切経の関係史料が所蔵されている。その内訳は、経巻類が十三点、目録類（貞元新定釈教目録）が六点で、これらはすべて山田文昭氏の旧蔵になるものである。氏の生前、その蒐集品は「夢白廬文庫」という彼個人の文庫に保管されていたが、その没後、ゆかりの学校や学友に贈られたといい、同朋大学の前身にあたる真宗専門学校にも、その創設者である住田智見氏との深い交友関係によって、法隆寺一切経十九点を含む二〇〇点あまりの蒐集品が寄贈されることになった。⁽⁵⁾当学園所蔵の法隆寺一切経のほとんどに、「夢白廬文庫」「山田文昭蔵」「真宗専門学校図書」の朱陽角印が捺されているのはそのためである。

ここで、山田文昭氏の人物像について少し紹介しておく、明治十年（一八七七）、愛知県碧海郡矢作町大字上佐々木字梅ノ木（岡崎市上佐々木町字梅ノ木）の正福寺に生まれている。明治三十七年（一九〇三）、同寺の第十四世住職となる一方、東京巢鴨の真宗大学（大谷大学前身）、および真宗大学研究院を卒業、その後、同学の図書係や図書館長を経て、大正元年（一九一二）に図書館長との兼務で同学の教授に就任している。同朋との関わりについては、大正十三年（一九二四）に真宗専門

学校の教授に就任して以来、昭和二年（一九二七）まで奉職したほか、昭和八年（一九三三）に死去するまでの間、大谷大学と真宗専門学校の教授をふたたび務めることもあったらしい。⁽⁷⁾代表的な著作として、『真宗史稿』⁽⁸⁾、『真宗史之研究』⁽⁹⁾、『日本仏教史之研究』⁽¹⁰⁾の三部作があり、その研究は「基礎的史料の影写や翻刻を早くから手がけ、根本史料に基づく真宗史学を樹立した」というように評されている。⁽¹¹⁾また、貴重本や貴重史料の蒐集につとめたことで知られ、法隆寺一切経もそのような彼の関心から蒐集されたもので、彼の旧蔵になる法隆寺一切経のほとんどは大谷大学に寄贈され、その数は百点あまりを数える。⁽¹²⁾

さて、法隆寺一切経に言及した最新の論考によると、その現存巻数は管見で、断簡を含めて千五百巻余りであるという。⁽¹³⁾次章で述べるとおり、書写された一切経は『貞元新定釈教目録』という経録（仏典目録）に基づいて、全部で七百余巻にものぼったと推定されているが、その全体の規模からすると、同朋学園にはわずかに十九点が残されているにすぎない。加えて、これら所蔵品を対象とした法隆寺一切経の研究は、ほとんど本学ではなされてきていないに等しく、昭和四十七年（一九七二）に山田文昭コレクションの一部として目録化されて以来、平成十八年（二〇〇六）の文昭コレクション関係の展覧会にいたるまでの間、目立った成果と呼べるものはわずかに二つしか挙げることができない。

ひとつは、平成九年（一九九七）七月、東海印度学仏教学会に関連して、同朋大学で催された「第一回大蔵会展観」の目録で、山田文昭氏の

(図表2) 「アーカイブズ閲覧」法隆寺一切経データベース リストページ

同朋大学佛教文化研究所紀要 第三十五号

四

アーカイブズ閲覧

MENU

ホーム 調査史料DB 人物・花押DB 研究所展示 研究所活動

法隆寺一切経(同朋学園貴重書)						
No	名称	年代	形状	員数	寸法	備考
1 法隆1	大雄殿経巻第1	保安3年6月10日 1122	紙本墨書	1点 (全11紙)	縦25.8×長588.6	—
2 法隆2	能断金剛般若波羅蜜 多經	長和元年8月19日 1012	紙本墨書	1点 (全20紙)	縦26.0×長1036.9	—
3 法隆3	座阿般若波羅蜜經巻 第20	永久3年10月5日 1115	紙本墨書	1点 (全17紙)	縦25.7×長822.4	—
4 法隆4	座阿般若波羅蜜道行 經巻第9	大治2年4月2日 1127	紙本墨書	1点 (全18紙)	縦27.0×長863.1	—
5 法隆5	大方広華嚴經第16	—	紙本墨書	1点 (全16紙)	縦27.3×長822.7	—
6 法隆6	大方広華嚴經第17	康和3年2月25日 1101	紙本墨書	1点 (全19紙)	縦27.2×長991.0	—
7 法隆7	大方広華嚴經第36	長寛2年12月2日 1164	紙本墨書	1点 (全22紙)	縦25.5×長1154.2	—
8 法隆8	大宝積經巻第113	保安4年5月30日 1123	紙本墨書	1点 (全18紙)	縦26.4×長903.3	—
9 法隆9	大般涅槃經巻第9	—	紙本墨書	1点 (全14紙)	縦25.7×長709.4	—
10 法隆10	灌頂七万二千神王護 比丘呪經第1	—	紙本墨書	1点 (全15紙)	縦25.8×長692.3	—
11 法隆11	阿毘曇婆沙論巻11	天治2年2月6日 1125	紙本墨書	1点 (全31紙)	縦25.5×長1540.4	—
12 法隆12	舍利仏阿毘曇論巻3	—	紙本墨書	1点 (全30紙)	縦25.4×長1492.4	—
13 法隆13	舍利仏阿毘曇論巻9	—	紙本墨書	1点 (全27紙)	縦25.5×長1288.3	—
14 法隆14	貞元新定釈教目録	—	紙本墨書	1点	縦27.8×横16.5	—
15 法隆15	貞元新定釈教目録	大治4年2月16日 1129	紙本墨書	1点	縦28.2×横16.0	—
16 法隆16	貞元新定釈教目録	—	紙本墨書	1点	縦28.0×横16.5	—
17 法隆17	貞元新定釈教目録	—	紙本墨書	1点	縦28.2×横16.0	—
18 法隆18	貞元新定釈教目録	—	紙本墨書	1点	縦28.0×横16.0	—
19 法隆19	貞元新定釈教目録	—	紙本墨書	1点	縦27.8×横17.0	—

寺院リストに戻る

Copyright(c)同朋大学仏教文化研究所 All Rights Reserved.

紹介のほか、法隆寺一切経一点一点の書誌情報と簡略な解題が付されている。¹⁵ おそらく、『昭和資財帳づくり』というコンセプトのもと、法隆寺で行われてきた宝物調査の成果が刊行され、同年の三月、法隆寺一切経の全貌も明らかになっているから、¹⁶ そのことを承けて、同朋大学でも同朋学園所蔵の法隆寺一切経を東海印度学仏教学会の開催にあわせて公開したもの、と推察される。

もうひとつは、平成十二年（二〇〇〇）、二年間の計画で、法隆寺一切経関連の史料十九点すべてを修復した、その修復時の知見に基づいた書誌学的な論考である。伊東ひろ美氏が執筆したものであるが、内容から推して、おそらくは修復を依頼した滋賀・坂田墨珠堂の専門的知見に基づいて成稿されたものか、と推測される。形状を中心に、今までわかっていなかった書誌情報を、詳細に、かつ、合理的に、わかりやすく解説した非常に有意義な論考であるが、対象が「貞元新定釈教目録」のみにとどまっており、残念ながら、経巻については言及がないことが惜しまれる。¹⁷

以上のように、同朋学園に所蔵されている法隆寺一切経について、簡単に振り返って記述してきたが、研究という観点からすると、いずれも史料紹介の範囲にとどまるものでしかなく、史料的な価値づけについてはむろん、その歴史的意義についてもほとんど論じられてきていない。そこで、今秋のデジタルアーカイブスの立ち上げを通して、改めて同朋学園所蔵の法隆寺一切経を整理し、分析する作業に着手することに

した。データベースのサンプルを参考図表として引用しておいたように（図表2）、法隆寺一切経の全紙をデジタル画像で閲覧できるようにしたほか、調査内容は他の研究機関における典籍調査等で一般的に行われているような調査カードの形式で示し、名称、形状、法量、奥書などの書誌情報を一覧にして表示している（図表3・4）。

それでは、この画像一体型データベースが、法隆寺一切経の考察になぜ有効だと考えるのかというと、奥書の記載内容を中心に考察が進められがちであった従来の研究に対して、奥書以外の潜在的な情報を副次的に利用する活路を新たに開いて、歴史史料のレジーム（慣行、制度、ルール）に変化をもたらす契機にできるのではないかと、というビジョンを抱いているからである。特に、法隆寺一切経のような知識経の場合、巻頭から巻末まで全体に目を通していくと、「写経体」と呼ばれた国家機構による整然とした写経とは異なり、文字の粗密や筆致の乱れなど、民間写経ならではの特徴を抽出することができる。また、法隆寺一切経は法隆寺僧が主体となつて、一巻を一人で書写しているケースがほとんどである。とすれば、奥書部分だけを切り取るのではなく、『経巻一巻まるごとの姿』というものを注意深く観察し、視覚的情報に置き換えることができれば、そこから何かしらの歴史的情報を引き出していくことも全く不可能ではないはずである。むろん、方法論としては未知の段階のものではあるが、今回、画像一体型データベースの構築にあたって、一点一点の史料を一紙一紙、自分たちで撮影していく作業を通して、新

同朋学園(愛知県名古屋市)

No7へ No9へ

No8.大宝積経 卷第113(法隆寺一切経)

大寶積經卷第百一十三
 法門品第一
 如是我聞一時佛在王舍城耆闍崛山中與八萬四千人俱
 諸大比丘八千人俱諸菩薩摩訶薩六千人俱
 諸聲聞緣覺十萬諸佛世界而未曾見者
 摩訶薩婆訶白佛言世尊所言法門云何為法
 門佛告迦葉所謂法門者謂諸法調伏故受
 持故或淨戒入禪定故得智慧故解知實
 義得解脫故共三脫門無所遮故名為聖人
 所行法故善修四念處故離一切不善法故
 安住四正勤故善斷如意足故成純信根
 故信佛法得成成就堅信於佛法僧故不
 餘過謬改勤行離一切煩惱故善修七菩提
 分離一切不善如實修一切善法故善知正
 念正智方便故善修一切諸善法故善知定
 慧方便故成五支故不為一切煩惱之所
 亂故善修七菩提分故善知一切法中何
 方便故善知聖道方便故善知正見正定方
 便故得四無所信外道故依義不依誑依
 智不依識依了義不依不了義依依法不
 依人故離四魔故善知五陰故斷一切煩惱
 故得最後身故離生老病死故斷一切愛
 煩惱若斷集證滅道故善見四聖諦故於
 佛法中不捨餘道故阿耨多羅三藐三菩提
 故能八背捨故解脫天之所謂故從本已
 來專心行道故樂阿蘭若寂故安住聖法中
 故樂佛法儀式故心不傾動故不親近出家

前頁へ 次頁へ

年代	保安4年5月30日 1123	員数	1点
装丁	卷子装	材質	紙本墨書
書写者	能賢		
法量	縦26.4cm × 長903.3cm		
奥書	【奥書】 (異墨)一校了」／保安四年五月卅日書写了 僧能賢／為滅罪生善除交与樂也／校了		
備考	法隆寺ほかに僚巻あり ⇒界線、方印、軸などの詳細情報はこちらへ		
所蔵者	同朋学園(愛知県名古屋市)		
調査日	2015年6月17日	調査者	藤井、工藤
展示履歴	2015年度後期展示		

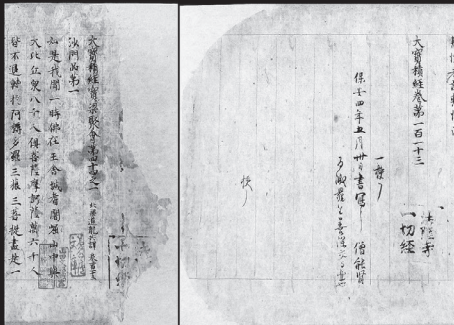
法隆寺一切経のリストに戻る

Copyright(c)同朋大学仏教文化研究所 All Rights Reserved.

法隆寺における一切経事業の歴史的意義について―史料価値の在りかを考える―(藤井)

同朋学園(愛知県名古屋市)

No.8 大宝積経 巻第113(法隆寺一切経)



巻頭

表紙

法隆寺一切経印
表紙・第1紙綴目(裏)

法隆寺一切経印
第1紙・第2紙綴目(裏)

法隆寺一切経印
第2紙・第3紙綴目(裏)

法隆寺一切経印
第3紙・第4紙綴目(裏)


法隆寺一切経印
第9紙・第10紙綴目(裏)


法隆寺一切経印
第15紙・第16紙綴目(裏)

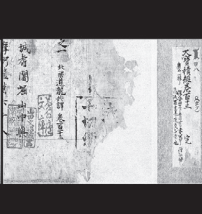
法隆寺一切経印
第16紙・第17紙綴目(裏)

法隆寺一切経印
第17紙・第18紙綴目(裏)

法隆寺一切経印
第18紙(表)







法隆寺一切経
標度表外観

法隆寺一切経
標度表外観

法隆寺一切経
標度表外観(山田文昭筆?)

大宝積経 巻第113 詳細データ

前カードに戻る

伝存状況	完存	紙幅	表紙(残存部最大幅): 5.3cm
写刊	写本		第1紙: 50.7cm
形状	巻子		第2紙: 50.7cm
紙質	楮紙		第3紙: 50.8cm
紙色	白		第4紙: 50.7cm
紙数	18紙		第5紙: 50.7cm
紙高 (2紙目を計測)	28.4cm		第6紙: 50.7cm
界線	墨界		第7紙: 50.7cm
界高 (2紙目を計測)	20.2cm		第8紙: 50.7cm
界幅 (2紙目を計測)	1.8cm		第9紙: 50.8cm
天界上余白 (2紙目を計測)	2.4cm		第10紙: 50.8cm
地界下余白 (2紙目を計測)	3.7cm		第11紙: 50.8cm
軸	合わせ軸か		第12紙: 50.6cm
方印	裏方印「法隆寺一切経」 料紙の綴目・紙背に捺印 縦4.5cm×横4.5cm 表紙・第1紙綴目裏、第1紙・第2紙綴目裏、第2紙・第3紙綴目裏、第3紙・第4紙綴目裏 第9紙・第10紙綴目裏、第15紙・第16紙綴目裏、第16紙・第17紙綴目裏 第17紙・第18紙綴目裏、第18紙表	第13紙: 50.7cm	
印記	すべて朱印 「夢白蓮文庫」縦3.3cm×横1.3cm、「山田文昭蔵書」縦3.3cm×横1.1cm 「真宗専門学校図書館」縦3.6cm×横1.5cm	第14紙: 50.6cm	
裏花押	なし	第15紙: 50.6cm	
その他		第16紙: 50.5cm	
スクロール版	スクロール版へ 注: 画面は巻末に飛びますので巻頭まで一度スクロールさせてからご覧ください	第17紙: 50.6cm	

法隆寺一切経のリストに戻る

Copyright©同朋大学仏教文化研究所 All Rights Reserved.

しい評価軸をプラスできないか、その余地を前向きに検討してみることとした。¹⁸⁾

その一例として、同朋学園所蔵経のなから、最も古い書写年代を持つ、長和元年（一〇一二）八月十九日、行教によって書写された『能断金剛般若波羅蜜多經』を挙げてみたい（巻頭口絵参照）。というのも、この経巻については、大谷大学にも長和元年（一〇一二）八月二日の行教の奥書を持つ『十地經論』巻十が蔵されていて、比較史料に恵まれているだけでなく、承徳年間（一〇九七―一〇九九）に開始されたとされる法隆寺の一切經書写事業の期間に比すると、八十年も早い奥書を持つ点で特異な位置を占め、法隆寺一切經史に書き換えを迫る可能性を持っているからである。たとえば、大谷大学の法隆寺一切經プロジェクト（平成8―平成10年度科学研究費補助金基礎研究（B）（2））で研究代表をつとめた竺沙雅章氏も、同校所蔵の長和元年經について、「現在考えられている書写開始時期より一世紀ほどさかのぼるものであり、注目される。法隆寺一切經では、奈良時代あるいは平安時代前期に書写された経巻を尋ね求めて一切經の一具として編入することが多く行われているので、これもそれと同様なものとも想定できるが、十一世紀初頭という他に類例がないこと、承徳三年に時期的に近接していることから、法隆寺一切經書写の開始年次を検討する上で極めて重要な史料といえよう」¹⁹⁾と述べており、議論の進め方次第では、法隆寺における一切經書写の開始時期を遡らせる材料ともなりうる一方で、法隆寺一切經には奈良

から平安時代初期の古写經を利用した、いわゆる転用經の存在が知られているから、長和元年經もまた転用經であった可能性を示唆している。なお、これら両卷の奥書を紹介しておく、まず同朋学園所蔵の長和元年經の卷末には、

能断金剛般若波羅蜜多經 （當紙力）

長和元年

子八月十九日 僧行教

書了²⁰⁾

というようにある。また、大谷大学蔵の長和元年經の卷末にも、上記とまったく同筆で、

十地論卷第十

長和元年

子八月二日 僧行教

書了²¹⁾

と記されている。

ところが、残念ながら、書写者である行教については、どのような人物かがわかつてはおらず、²²⁾長和という元号についても、実は寛弘から改元したのは十二月二十五日であるから、²³⁾厳密には「長和元年八月」は存在しないことになり、奥書からだけでは問題を解決できない。そこで、経巻全体を改めて見てみると、同朋学園所蔵経の場合は、「聖教序」の部分にあたる第一紙と第二紙、および奥書の部分はまったくの同

筆で、かつ、非常に丁寧な書きぶりが見てとれるが、第三紙以降から奥書直前の第十九紙までは、別筆かと判断されるほど、字体や筆致が乱雑に変化している。したがって、これももし本当に別筆だとすれば、一部残されていた行教筆の写経を用いて、後世にこれを補って一卷としたというケースが想定でき、既存経のかなり逼迫した転用状況を窺わせる史料となる。しかし、大谷大学所蔵経の場合は、丁寧に書記されているのは奥書のみで、本文は最初から乱筆であるばかりか、途中からは約五行ごとに筆の調子が激しく変化するなど、その書写の様子はまったく安定せず、筆致がめまぐるしく変化している。二つの長和元年経を比較すると、奥書は一見して同筆とわかるものの、經典本文については筆致の変化が著しく、即断できない。ただ、文字によっては書き癖が一致する箇所もあるから、もし両巻ともすべて行教が書写したものであるとするならば、先に想定したような状況は成り立たなくなる。むしろ、元号に誤認があるこのような民間写経がどこで写され、どこに伝わったのか、法隆寺も含めて、その状況を想定していくことが、当然のことながら、長和元年経の歴史的位置を知る手掛かりとなる。いずれにせよ、現段階では単なる仮定にすぎないが、今後、料紙の大きさや罫線の具合など、その他の要素も含めて視覚情報として抽出し、総合的に比較、判断できるような形でデータベースを改訂していくことで、このような特異な位置にある長和元年経が持つ意味など、一定の研究成果に結びつけていきたい、と考えている。

かつて、堀池春峰氏は、「法隆寺一切経の奥書にわずかに遺された近里、住民との関係は両者の史的関係を示す唯一のものというべきである」と述べた。⁽²⁵⁾確かに、一切経の奥書が示す事実は、中世法隆寺の姿をわれわれに最もよく教えてくれる材料であることに疑いはない。しかし、当学園に所蔵されている関連史料が十九点という点数にとどまることもあり、一卷一卷の筆致などを通して書写者と向き合い、奥書だけでなく、経巻全体を一つの史料として見る視座が確立できれば、法隆寺における一切経書写をめぐる状況について、今までとは違った切り口から理解を深めることもできるのではないだろうか。近年ではSATやCBETAなど、『大正新脩大藏経』関連テキストのデータベース化が進み、⁽²⁶⁾それを承けて仏典や古写経の画像データベースへの取組みも意欲的になされているから、⁽²⁷⁾そうした先行例を参考にしつつ、「アーカイブス・閲蔵」の設計をさらに充実させるとともに、試行錯誤を繰り返しながら、この問題について可能性の幅を広げてみたい、⁽²⁸⁾と思っている。

第二章 平安時代後期の法隆寺復興と法隆寺一切経

第一章では、「アーカイブス・閲蔵」における画像一体型データベースの構築過程を通して、同朋学園所蔵の法隆寺一切経を史料としてどう価値づけていくか、その方向性について、現段階での可能性の道筋を示し

た。では、そもそも法隆寺一切経とはどのような歴史的背景をもって書写されたもののだろうか。本章では、こうした法隆寺一切経の歴史的意義をめぐって、どのような議論が過去になされてきたか、現代に至るまでの研究史を簡略に踏まえながら、問題点を整理していくことにしたい。

法隆寺一切経の研究史において最も注目すべきは、昭和初期、法隆寺管長の佐伯定胤氏の手によって、寺内の中院文庫の中から保安三年（一一二二）三月二十三日付の「法隆寺林幸一切経書写勸進状」（以下、「林幸勸進状」と略す）が発見されたことである。²⁹この平安時代後期の法隆寺僧による勸進状は、保安三年（一一二二）以降、一切経書写事業の中心人物であった林幸が過去の経緯を振り返ったもので、永久二年（一一一四）頃から法隆寺僧の勝賢によって書写が開始されたことをはじめ、いくつかの具体的な事柄が記されている。果たして、この発見以来、法隆寺一切経の研究は、この勸進状の内容をベースに、各経巻の巻末に記された奥書の内容を加味しながら進められていくこととなった。

まず、この「林幸勸進状」の発見とあわせて、法隆寺一切経の存在にいち早く注意を促したのは大屋徳城氏である。大屋氏は「林幸勸進状」の全文を翻刻して紹介するだけでなく、法隆寺蔵の經典のなかから、『行信經』と呼ばれる奈良時代の古写経など、「法隆寺一切経」の黒方印を捺したものをいくつか拾っているほか、天治元年（一一二四）法隆寺僧が一切経音義料として書写した『新撰字鏡』十二巻にも言及して

いる。また、法隆寺に蔵されているもの以外に、『古経題跋』にみえる零巻のことや、宋版の版経のことなどにも触れているが、いずれも紹介の範囲にとどまるもので、氏自身、今後の研究に期待する旨を記して稿を締めくくっている。³⁰

その後、法隆寺一切経の研究史にとって大きな画期となったのが、堀池春峰氏の研究である。平安時代における一切経書写全般の流れを押さえたうえで、期間、内容、特色、動機、意義など、多岐にわたって考察を進めており、氏の研究成果は現在に至るまで法隆寺一切経研究の基盤となっているといつて過言ではない。特に重要なのは、「林幸勸進状」と法隆寺伝存の一切経の奥書に基づいて、法隆寺の一切経は承徳年間（一一〇九七―一一〇九九）から大治六年（一一三二）頃までの約三十三年間を要して書写されたもので、これを三つの時期に分けて把握している点にある。³¹

まず、第一期については、法隆寺蔵の『大宝積經』巻第七十四に、承徳三年（一一〇九九）八月の頼円書写の奥書が見えることをもって、承徳年間（一一〇九七―一一〇九九）を法隆寺における一切経書写の創始期とみている。そして、「林幸勸進状」に記載された勝賢の勸進を十五年ほど遡るという意味では注目すべきだしながらも、勸進僧名は明記されず、「法隆寺結縁一切経」と記載されるにとどまっていることから推して、この時期の経巻書写はまだ勸進組織による積極的なものではなかったであろう、と推定している。

次に、第二期は、「林幸勸進状」の内容に基づいて、永久二年から元永元年（一一一四～一一一八）、法隆寺僧勝賢によって勸進された時期とする。元永元年（一一一八）十月二日、勝賢は勸進一切経の開題供養を営んでいること、それまでに二千七百余巻が完成していたことが勸進状から知られるほか、法隆寺に伝存する一切経中に当該期間の奥書を持つものが六十五巻あり、書写自体は法隆寺僧によって行われたが、その施主名から推して、勝賢は権門勢家を対象とせず、勸進聖として法隆寺近傍の郷里の有力者層を施主に募って勸進喜捨を求めたことなどが知られるとする。また、この期間、法隆寺別当は経尋であったが、保安二年（一一二二）、経尋が前任別当の時に転倒した東室の南端を改造して聖霊院を新建していることに注目し、その創建には三昧堂衆の先駆的な聖徳太子信仰が影響したかもしれない、経尋の聖霊院創建計画と平行して進められた勝賢の一切経書写も三昧堂衆と関係があった可能性を示唆している。

つづく、第三期については、同じく「林幸勸進状」の内容に基づいて、保安三年（一一二三）勝賢の勸進を継承した林幸によって開始され、さらに大治六年（一一三二）二月の『成唯識論掌中樞要』奥書に基づいて、大治六年（一一三一）をその活動の最下限と推定している。⁽³³⁾ 林幸は、聖霊院本尊の開眼供養を経た翌年の三月、太子命日を期して、聖徳太子の菩提を弔うため、この新しい一院に一切経を奉安し、残り四千四百余巻の書写達成を目指して勸進を始めたが、宮内庁書陵部に所

蔵されている天治元年（一一二四）の『新撰字鏡』⁽³⁴⁾が法隆寺一切経料として書写されていることに着目すると、勝賢当時の動機と、林幸当時の動機とでは、明らかな相違があり、林幸が継続した一切経書写事業は、その三年目に新しい自主的な方向に進展していた可能性を指摘している。すなわち、これは『新撰字鏡』十二巻を、林幸や静因ら、法隆寺僧が分担して書写したものであるが、国語学のこの著名な資料が一切経中に含まれた例は他にないこと、また、たとえば静因奥書にみえる「為字決」という一句は、聖教を正確に写して忠実に解説することを意味しており、法隆寺で一切経書写が行われていくうち、学侶の間に漢字、音義、訓読、釈義などについての疑問が生じたとみられることなど、『新撰字鏡』という書の内容によって、法隆寺一切経には學術書としての活用が考慮されていた、とする。そもそも法隆寺一切経は一切経書写の風潮に刺激されたものではあったが、一切経を転読して太子追福に資するという信仰的な面だけにとどまらず、学侶を養成し、学問寺としての伝統を維持継承しようとした意図がそこにはあったという点、院政期に盛行した一切経書写の風潮とは一線を画するものとして、法隆寺一切経に固有の歴史的意義を見出している。そして、「一切経の欠除⁽³⁵⁾に対する仏法根本寺としての反省」と、「法隆寺問寺としての寺僧の自主的見地によって書写された」のが法隆寺一切経であったと、その性格を規定し、価値づけたのである。

さて、法隆寺一切経の研究史において、次に注目すべきは、法隆寺昭

和資財帳の調査結果をうけて、同寺に蔵されている經典類を詳細に紹介した、山本信吉氏の論考である。⁽³⁵⁾ 法隆寺蔵の一切経は、重要文化財指定の九百二十六巻と、文化財未指定の約六十八巻の、合わせて九百九十四巻であり、それらの奥書に注目して、書写年月日、法隆寺勸進僧、結縁執筆者、書写発願の趣旨、修理の歴史などを明らかにしている。そして、聖霊院の新建、および本尊である聖徳太子像の造立時期と重なることから、平安時代後期の末法思想のなかで、急速な高まりをみせた釈迦信仰と、庶民の間に高まりつつあった聖徳太子信仰を背景に、一切経書写は行われたものであるとする。特に、その事業開始の経緯については、承徳二年（一〇九八）校合奥書のある『大般若波羅蜜多經』巻第二十四が⁽³⁶⁾『大般若經』書写本のなかに残っていることに注目し、この奥書には一切経に関する記事はないものの、⁽³⁷⁾『大般若經』の書写事業が発展して一切経の事業となることは他に例があることから、法隆寺興円の発願した『大般若經』書写が勝賢の一切経へと発展していったとみる。さらに、『南海寄帰内法伝』など、学問研究に関係深い典籍類が法隆寺僧によって書写されていることや、『寺要日記』などには、この時代、法隆寺内で様々な法会が行われていたことが記されているが、一切経中のいくつかはそうした法会の料経などに転用されていたらしく、その意味では法隆寺の教学興隆に寄与しているとして、当該一切経は學術書としての活用を考慮したものであった、とする堀池氏の見解を補強している。

また、これら一切経は僧俗や庶民が力を合わせた結縁一切経であることが特徴であるが、奥書によると、書写者の結縁の趣旨は、聖徳太子を讃仰し、父母、縁者、恩師などの亡者追善と極楽往生を願ったものが多く、聖徳太子に結縁した施主や筆者は、神官の子女、法隆寺の役僧、興福寺や薬師寺の僧侶、法隆寺近在の豪族や農民などであったとして、堀池氏の見解を継承しながら、法隆寺僧が大和国を中心とする神社、寺院、地方官人、地方豪族、農民などに結縁書写を勸進した様子を具体的に跡づけている。なお、興福寺との関係については、薬師寺との協力関係を視野に入れながらも、実態は不明であるとする。ただし、天仁二年（一一〇九）以降、法隆寺別当をつとめた経尋には注目しており、勝賢が一切経の勸進を始めた永久二年（一一一四）頃は経尋による聖霊院造営が行われていた時期にあたっているから、勸進途中の元永元年（一一一八）、二千七百余巻しか完成していない段階で勝賢が供養を行ったことは、聖霊院完成と関連があったかもしれないとみる。一方、薬師寺との関わりについても、奥書中に薬師寺が一切経の勸進書写の一部を分担請負していたように考えられる記事があること、結縁筆者の中にも薬師寺僧の名が見えること、奥書中に薬師寺本をもって校合したとする記事があることに注目し、書写のテキストとして用いる經典をいかに確保するかという問題に対して、薬師寺の經典がテキストとして利用された可能性を示唆している。

これ以降、法隆寺一切経の研究史で注目すべきものとしては、前章で

も触れた、大谷大学の研究プロジェクト「法隆寺一切経の基礎的研究―大谷大学所蔵本を中心として―」がある。このプロジェクトは、同学が当該一切経のまとまったコレクションを所蔵していることから、その基礎的な調査研究を行うことによって、日本における一切経（大蔵経）の受容と展開を解明し、日本古代仏教史に重要な考察材料を提供することを目的に進められたものである。特に、書誌データや現存目録が充実しており、大谷大学以外に所蔵された法隆寺一切経もできるかぎり網羅され、この調査段階での残存状況をつぶさに知ることができる点、非常に有意義な内容となっている⁽³⁸⁾。

さらに、その後、この大谷大学のチームメンバーとして一切経の整理分析の作業に携わった宮崎健司氏が、法隆寺一切経の書写で重要な役割をはたした『貞元新定釈教目録』の書写例の分析を通して、これまであまり明らかにならなかった法隆寺一切経の書写状況の解明を試みている⁽³⁹⁾。また、氏は転用経の意味を重視しており、大東急記念文庫に蔵されている『大乘広百論釈論』巻十の承和八年（八四一）の識語に基づいて、こうした平安時代前期の古写経を、大治二年（一一二七）に法隆寺僧静因が修治を加えて一切経に編入していることについて、法隆寺ではもともと『貞元新定釈教目録』の入蔵録に基づいた五三九〇巻だけでなく、さらに『続貞元釈教録』をも含んだ七一〇〇巻の書写勸進が目指されたが、法隆寺一切経事業の最終段階にあたっていた当該期において、完成が急がれたため、古写経の具備という方法をとるようになったもの

で、このことは書写事業にとって大きな方針の変更であった、と意義づけている。

以上のように、法隆寺一切経の研究は、「林幸勸進状」の発見以来、大方その内容をベースに、各経巻の奥書の内容をそこに加味して進められてきた⁽⁴¹⁾。わけでも、堀池氏の研究は大きな画期をなしており、法隆寺一切経をあらゆる角度から考究したきわめて有意義なものであるが、特に「法隆寺問寺」と呼称された法隆寺の性格に着眼しつつ、三つの時期に分けて一切経を分析し、後半期は学侶養成という新たな目的が加わっていたことをもって、当時の一切経書写ブームのなかにあつて、法隆寺一切経の独自性を提示したことの意味は大きい。

しかしながら、この堀池氏をはじめ、諸氏が指摘してきたように、確かに法隆寺一切経書写は当時の一切経書写ブームと聖徳太子信仰の昂揚を受け、法隆寺僧が中心になって勸進を行ったものではあるが、法隆寺一寺として見た場合、おそらく単発で行われた事業ではない。次章で論じていくように、聖霊院が創建された保安二年（一一二一）は、聖徳太子五百回忌という法隆寺にとって大きな節目にあたっており、かつ、この聖霊院が鎌倉時代にかけて法隆寺復興の重要な拠点としての役割を担っていくことを考えると、聖霊院に安置された当該一切経もまた、法隆寺復興の動向を視野に入れたうえで、その歴史的意義を問い直すべきだと考える。また、一切経書写当時、法隆寺別当をつとめた経尋という僧侶は、後に興福寺別当に昇った人物であり、こうした寺外の有力僧が

聖靈院創建や一切経書写事業に関わりを持っていたことを、もう少し積極的に評価する必要があるように思う。さらに、堀池氏が、法隆寺一切経の独自性を学問寺としての性格に起因したものと見た、その考察は以降の諸氏の研究に影を落としているが、次章でも述べるように、法隆寺の学問寺としての内実が伴うのは、一切経以降のことといって過言ではなく、第三期の林幸の時期に書写目的に変化があったと堀池氏も指摘していたように、一切経の書写が進むなか、寺僧の間に教学への深い関心が次第に醸成されていった、と考えたほうがよい。

では、そうした教学への関心が醸成される以前、聖徳太子の五百回忌という大きな画期でもあった保安二年（一一二二）、従前の信仰を踏まえつつも、西院と東院の中間地点に聖靈院という形で、しかも経尋という寺外から送りこまれた僧侶によって、新たに信仰の拠点が設けられた、そのことにはいったいどんな意味があったのか。「林幸勸進状」や一切経の奥書だけでなく、法隆寺に関連する他の史料にも目を向けて、そこから書写事業が行われた時期の法隆寺の動向を拾い上げてつきあわせみれば、法隆寺一切経をもっと広角的に捉えることも可能になるのではないだろうか。そこで、次章では、この点に留意しながら、法隆寺近在の官人や豪族、農民などを多く施主として、七千巻という民間写経としては異例の巻数を目指した法隆寺の一切経について、これが安置された聖靈院の創建意義とあわせて改めて考察していくことにしたい。

〈第三章 平安時代後期の法隆寺復興と興福寺

―第三の霊場としての聖靈院創設―

永久二年（一一一四）以降、本格的な一切経の書写勸進を行なった勝賢による勸進の背後に、法隆寺別当経尋の存在があったことは、堀池春峰氏以来、諸氏の注目してきたところである。すなわち、保安三年（一一二二）三月二十三日付の「林幸勸進状」には、林幸が新たに創建された聖靈院に一切経を安置することを敬白するなか、勝賢の勸進の功績を語るよりも前に、「長吏法眼和尚」という呼称で経尋が登場している。

法隆寺勸進僧林幸敬白（朱印…法隆学問寺中院五師印）（朱印…良訓）

請特蒙十方檀主知識助成。書写一切経論等。

奉安置寺家新聖靈院圖

右一切経者。是一代所説教法。其部類互□十二。而然阿難結集之後。五天流布以降。大唐入藏所伝之目錄。大小乗経論律等。惣七千余巻也。而能説釈尊。早隠双困□間。過二千年。所説經典伝尚扶桑之下。余五百歳。適值釈教流布之時。豈非宿福深厚之身乎。今生若不結縁者。来世将□何時哉。因茲当寺禅侶。每礼誦之次朱尅^⑦。奉崇一切経論律等。諸山近日熾盛也。於仏法根本当寺如何。闕斯事。将今法燈不滅之前。争再挑光哉^{云々}。而猶於満□。衆僧雖竭力励心。尚難成其功歟。爰林幸酬諸衆之歎念。催随順之緇素。寔

如以蚊虻。唯乃吸海水。以螻蟻力。傾大山也。但□所憑仰。当伽藍是救世觀音垂下之聖跡。釈迦遣教初伝之鴻基也。尋夫仏日照漢縁。法雨澍周地。留光於彼土。莫流洽於□朝。尔時我日本国邪風盛扇。正法之炬未暉。黑雲厚聳。三宝之名号未現。掛畏 聖德太子誕生用明天皇宮。伝莫伝之仏法。化難化之衆生。仍作十七之憲章。定群臣道俗之階。製三經之義疏。示凡聖三乘之異。建立七所之伽藍。化度一千之僧尼。三宝名号從此而創。□域中三乗学徒。自尔而羅於国内。凡知善惡。悟因果。莫不聖王広恩。尊法帰仏。縑素誰不被崇敬斯砌乎。就中当時長吏法眼和尚位新締構聖靈院。安置御影像。再闢法燈。專營脩治。而則書写件経論。副安彼花殿。防霧雨之難。捧香花之供矣。所以聖教揚響。資登霞聖（主脱）圖慧日増光。照 聖朝宝質。功德之沢。普沾結縁者。伝燈之祥。広及遍法界矣。抑以○永久二年之比。依僧勝賢勸進。所奉書写之経論二千七百余卷□。雖未究其功。且為開題以元永元年十月二日。囑小田原上人供養先了。其残経論四千四百余卷。未被書写。漸経五箇年焉。終為滿衆徒之願。始自今年三月之比。更所令勸進都鄙耳。仰願十方□檀主。致随分助成。奉加一帙一卷一帖一紙。被令遂其願者。共出三界火宅。同到安樂宝刹矣。敬白

保安三年^{壬寅}三月廿三日 勸進僧林幸権都那法師〔花押〕

都維那法師〔花押〕

^{（主脱）}
権寺大法師〔花押〕

寺主大法師〔花押〕

上座大法師〔花押〕

戒師法師〔花押〕

戒師法師〔花押〕

大法師〔花押〕

大法師〔花押〕

大法師〔花押〕

大法師〔花押〕

大法師〔花押〕 ※以下欠^{（主脱）}

これがその全文である。七千余卷の完成を目指したという一切経の書写に関する経緯は、前章と重複するので省くが、法隆寺が聖德太子ゆかりの日本仏教根本の聖地であることを綴った後に、経尋（長吏法眼和尚）が聖靈院を新建して聖德太子像を安置したこと、そしてその聖靈院に一切経を安置することで聖德太子（登霞聖靈）の菩提に資せんとしたことが記されている。また、元永元年（一一一八）十月二日、勝賢が営んだ勸進一切経開題供養では小田原上人が導師をつとめたことにも触れているが、この僧侶は興福寺の別所であった小田原山寺の迎接房経源のことを指すから、こうしたところにも一切経事業と興福寺との深い関わりが予測される。

それでは、法隆寺一切経勸進の中心にあつて、興福寺のバックアップを受けていたであろう勝賢とは、どんな僧侶であつたのだろうか。残

念ながら、この点については、詳細を知る手がかりはあまり残されていない。法隆寺一切経のひとつで、法隆寺蔵の永久三年（一一一五）『腹中女聴経』奥書に「勸進聖人僧勝賢、（中略）大和国平群郡目安里住人也」とあって、その出身地がわずかに判明するほか、大治元年（一二二八）の「紀姉子文書紛失状」に「大法師」とあることで、その地位が確認できる程度にすぎない。⁴⁵では一方、勝賢を支援し、聖霊院を創建した経尋はいったいどんな僧侶であったのか。こちらについては、まず『法隆寺別当次第』という寺内の史料が参考となる。これは各別当の代ごとに寺内でどんな出来事があったかを記録したもので、各項の冒頭にはそれぞれの別当の任期や所属、補任年次などが記されている。経尋の場合は、

経尋律師

治廿一年。興福寺黄苑。天仁二年己丑十一月晦夜任之。印鑑京白河御坊持参。⁴⁷

とあって、天仁二年（一一〇九）十一月三十一日に法隆寺別当に補任されたこと、法隆寺僧ではなく、興福寺の黄苑に所属した僧侶であったこと、二十一年ものあいだ、法隆寺別当の地位にあったことなどが判明する。また、経尋の本来の所属先である『興福寺別当次第』によると、彼は中納言藤原伊房の子息で、保安五年（一一二四）の興福寺権別当への補任を経て、大治四年（一一二九）には興福寺別当に補任されている。このように、経尋は出自も高貴で、後に興福寺のトップになっているこ

とからしても、かなりの有力僧であったと推測され、法隆寺の聖霊院はこうした寺外の有力僧が主導して創建されていたことが判明する。

そして、これに関連して把握しておくべきことは、別当補任という手続きを介して、この時期、興福寺と法隆寺とが本末関係にあった、という事実である。先の『法隆寺別当次第』を見てみると、別当が法隆寺僧から補任されることは十一世紀半ばを境になくなり、東大寺僧が連続的に着任する時期を経て、次第に興福寺僧が独占的に着任する状況へと移行していく。一般に、本末関係における末寺は、得分という一種の財産としてみなされる傾向にあったが、法隆寺の場合も当初は同様で、別当職の象徴ともいえるべき印鑑すら興福寺の住院に保管されたことからすると、⁴⁸補任後も別当は下向せず、興福寺内の自分の住院に居住していた、と考えられる。ところが、聖霊院創建や一切経書写に関わっていた経尋は、別当に補任された翌年、実際に法隆寺に下向したことがわかっている。⁴⁹従来、この点についてはあまり留意されてこなかったが、中世に向けて法隆寺が四天王寺をしのぐ聖徳太子信仰の一大霊場として急成長を遂げていくそこに、興福寺から下向した経尋の存在があったことは、やはり見逃されてはならないと思う。実際、法隆寺一切経の書写が行われた十二世紀初頭は、聖霊院の建立だけでなく、経尋がさまざまな施策を法隆寺内で試みていた可能性が高い。

たとえば、経尋が法隆寺で行ったのもっとも大きな試みは、西院と東院とを統合し、一元化したことにある。その契機は、永久四年

(一一一六)に勃発した法隆寺僧の反乱にあり、経尋はその機会を利用して、近年来、興福寺僧が就任してきた東院の院主職すら廃止して、別当が東院を直接支配できるよう制度を改めている。別当が興福寺から補任されるようになって以降も、実質的な寺務に関しては法隆寺の三綱たちが一定の力を持っていたと考えられるから、別当が法隆寺に下向するという状況変化によって、寺務に携わってきた寺僧との間に確執も生まれ、次第にそれが表面化していったのだろう。すなわち、『法隆寺別当次第』によると、永久四年(一一一六)、五師僧の暹尊をはじめ、二十余人の法隆寺僧が蹶起して東院を占拠、これによって三年ものあいだ、東院の院主職が停止されるという事態に陥っている。⁽⁵⁰⁾そこで、経尋は暹尊らを追却するとともに、同じく興福寺から補任されていた院主の隆嚴をも廃して、東院をその管掌下に置いたのである。経尋が別当として断固とした措置をとることで、本寺として興福寺の優位性が発揮されたことを、この一連の経緯はおそらく示すものとみてよい。⁽⁵¹⁾果たして経尋の任期中には、東院経営と直接的、間接的に連動するような出来事が相次いでいる。特に、保安二年(一一二二)、長いあいだ行方知れずになっていたという天平時代の『東院資財帳』が、経尋によって田舎小屋の反古文書の中から発見され、これに感嘆した経尋は重ねて紛失することのないよう丁寧に安置したということが、後世の識語として資財帳に追筆されている。⁽⁵²⁾おそらく、このタイミングでの資財帳再発見は、東院の由緒を正しく裏打ちするものとして法隆寺の霊場化の過程に大きな意味を

持っただけでなく、資財帳を管理する立場となることで、東院の新たな統括者である別当経尋の正当性をも裏打ちしたのではないか、と思われる。⁽⁵⁴⁾

とすれば、聖徳太子の五百回忌にあたる保安二年(一一二二)を中心とした時期、興福寺でも有力な地位にあった僧侶が法隆寺に下向し、別当として寺内を一元的に管理するカタワラ、新しく聖霊院を創建し、一切経の書写安置にも関わったことをどう捉えるべきだろうか。これについては、『法隆寺別当次第』経尋条にも「此任中。東室大坊新造立之。即南妻為堂殿。被安置聖霊御影像并仕者総五体」とあるのみで、直接、事の推移を跡づけられるような史料は残っていない。そこで、少し視点を変えて再考したいのが、「法隆学問寺」という呼称についてである。というのも、この呼称は天平十九年(七四七)に勅録された『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』の冒頭、縁起部分に登場しているものの、⁽⁵⁵⁾広く用いられるようになるのは、それよりもずっと後、ちょうど一切経の書写あたりを境にしているからである。すなわち、『法隆寺別当次第』など、寺内の史料をみると、経尋によって西院と東院の一元化が図られていく過程と平行して、法隆学問寺(西院)と上宮王院(東院)という対置的な形で、この呼称が一般化していることがわかる。特に、その最も端的な例が、鎌倉時代、聖霊院の院主となった顕真が著した『聖徳太子伝私記』で、⁽⁵⁶⁾上巻冒頭、「上宮王院者太子御住所故名上宮王院」として東院に関する事項を書き出した後、「次法隆学問寺〔又鶴里故云鶴寺云々〕

伝云、宮西有寺、名法隆學問寺云々。惣此寺七名号在、所謂聖国寺、七徳寺、宝龍寺、来立寺、法隆學問寺、鳥路寺、往生寺云々」と、つづけて西院に関する事項を書き列ねていて、⁽⁵⁹⁾両院それぞれの信仰空間としての特徴を呼称によって明確化した構成となっている。平安時代以降の法隆寺では、太子の斑鳩宮跡に建立された夢殿を中心とする東院は、救世観音垂迹の聖地である一方、金堂を中心とする西院は太子が建立した伽藍であり、釈迦の教えが初めて伝わった仏法根本の聖地だと謳っており、それは先に紹介した「林幸勸進状」にも、「伽藍是救世観音垂下之聖跡。釈迦遺教初伝之鴻基也」と記されていた通りである。したがって、従来、法隆寺一切経については、白河院に代表されるような、一切経具備によって寺院や寄進者の威光を示そうとする当時の風潮に対して、学問寺としての性格を象徴するところに特色があるとされてきたが、少なくとも「法隆学問寺」という呼称は、金堂の復興や聖霊会の整備など、法隆寺の再霊場化のプロセスのなかで認知され、定着していったものと考えたほうがよく、それは必ずしも法隆寺が過去、学問寺としての性格を有してきたという事実を意味しない。⁽⁶⁰⁾

そして、こうした一連の霊場化の動向をうけて、保安二年（一二二二）、ひとつの極点に達したのが聖霊院である。東院と西院、双方の信仰的特徴をあわせもったような堂舎として、それは建立されたとみられる。そのことは、本尊である聖徳太子像が、『勝鬘經』を講讀する俗形の姿でありながら、⁽⁶¹⁾金銅の救世観音像を、太子像の口の位置にそ

の頭部を合わせる形で胎内仏として安置することで、太子の講讀の言葉は観音菩薩の言葉でもあると暗示させるという、今までにはない画期的な表現がとられていることによく象徴されている。⁽⁶²⁾したがって、法隆寺一切経の書写がこの聖霊院を拠点として進められたことをより積極的に捉えるならば、その歴史的意義は信仰という側面だけにとどまらないものがあつたのではないかと想定することができる。

そこで、最後に、この点について、もうひとつ、考察の手がかりとして、近年、梶浦晋氏と落合俊典氏によって翻刻紹介された法金剛院藏『大小乗経律論疏記目錄』⁽⁶³⁾を挙げてみたいと思う。これは中国撰述書や日本の学僧の書を列記した龐大な目錄であるが、残念なことに序跋や撰者名がなく、どこの経藏の目錄であつたかは不明ながら、法相宗の教学盛行を反映する内容から、平安時代前期の興福寺経藏の現存目錄の写しではないかと推定されているからである。⁽⁶⁴⁾のみならず、卷上の奥書には、

法隆寺僧靜因之

卷下の奥書にも、

法隆寺沙門延清交

五師靜因伝賜之⁽⁶⁵⁾

とあつて、校正者と伝領者という形で、法隆寺僧二人の名前も見えている。そこで、この二人の僧侶について調べてみると、いずれも法隆寺内の史料に名前が残っている。まず、延清については、梶浦氏が「前

律師道靜置文」⁽⁶⁶⁾と「開浦院住僧解」⁽⁶⁷⁾を挙げて紹介しているが、法隆寺の『金堂日記』や『寺要日記』にも延清は登場しており、承暦二年（一〇七八）以降、法隆寺金堂に四天王像を施入したり、その翌年、金堂で初の吉祥御願がなされた際には六時導師のうちの一人として半夜導師をつとめるなど、延清は金堂再興に奔走した五師僧の一人であったことがわかる。なお、この金堂再興は、興福寺から補任された別当能算のもと、慶元や長好といった法隆寺の三綱たちと協力して行われていただけでなく、元の薬師寺別当であり、法隆寺に念仏別所として西別所庵室（金光院）を開いたほか、金堂再興の功績によって聖徳太子の再降臨と謳われた道靜（聖律師）⁽⁷⁴⁾という僧侶も関わっていたことは興味深い。次に、静因は、梶浦氏や落合氏も触れているように、法隆寺一切経の書写事業が盛んであった時期に、その書写校合に携わった五師僧である。最も早いところでは、書写事業の第二期にあたる永久二年（一一一四）四月、勝賢のもとで『無量義経』を書写していたことがわかっている⁽⁷⁵⁾し、一番年代が下がるころでは、『如実論反質難品』など、大治二年（一二二七）まで一切経の書写校合を行っていたことがわかっている⁽⁷⁶⁾。ちなみに、法金剛院への目録の伝来については未詳とされているが、伽藍復興という視座から眺めると、鎌倉時代、律僧として法隆寺復興に尽力した導御（円覚上人）の存在が浮かび上がってくる。『法金剛院古今伝記』など、導御の伝記をみると、文永八年（一二七一）、導御は法隆寺夢殿に参籠して聖徳太子の託宣を得て融通念仏の道に入ること

になったとあり、むしろこれは多分に伝説的な文言であるとしても、実際、法隆寺内の記録には、文永五年（一二六八）に西院西室を改造した際の奉行をしたことをはじめ、法隆寺における導御の具体的な活動が記されている⁽⁸⁰⁾。なお、この導御は唐招提寺系の律僧であるが、鎌倉時代における法隆寺と律僧との関係は深く、円照、叡尊など、著名な律僧たちの出入りとその活動が確認できる⁽⁸²⁾。このうち、東大寺戒壇院を律院として中興した円照は、法隆寺の東院内に律僧の活動拠点として北室を設置したが、これが後に導御へと譲られたらしく、導御についてはこのことをもって東院北室の最初の長老的な存在であったとする見解もあるほどである⁽⁸⁴⁾。また、導御は一方で、融通念仏勧進によって壬生寺、法金剛院、清涼寺地蔵院を復興し、それらの住持を歴任したが、特に法金剛院は導御の最大の活動拠点と目されているから、法隆寺旧蔵の目録の写しが法金剛院へと伝わった契機も、この導御という僧侶を介せば十分に説明することができる⁽⁸⁵⁾。

以上のように、『大小乗経律論疏記目録』の奥書に記された僧侶の名前や、本目録の法金剛院への伝来に着目すると、一切経が書写された時期をはさんで、法隆寺には複数の寺院から僧侶たちが出入りしていた状況があり、その連携のもと、漸次、伽藍や法会の復興が果たされていた様子が見てとれる。なお、延清と静因との間には、四十五年ほど、活動時期の隔たりがあったとみられるが、梶浦氏と落合氏が推測しているように、もし本当にこれが興福寺の目録の写しであって、⁽⁸⁷⁾「平安時代後

期の法隆寺が章疏集伝記類を蒐集しようとして、参考とした或る寺院の目録を書写した⁸⁸⁾という状況下に法隆寺に伝来したものとすれば、延清が校正したという事実から推して、承德年間（一〇九七―一〇九九）の興円や頼円らによる一切経書写よりも前に、一切経書写にも関連する経律論疏の目録が、すでに興福寺から法隆寺に渡っていたことになる⁸⁹⁾。ところが、延清の時代、確かに別当は能算という興福寺から補任された僧ではあったが、しかし、この別当能算のもとでは聖霊会が二度も厳修されながら、法隆寺僧が別当に背いて十二ヶ条の奏状をもつて訴申ししたことが『法隆寺別当次第』には記録されている⁹⁰⁾。治暦五年（一〇六九）には太子絵伝を掲げた絵殿が建立されたり、聖霊会本尊も新たに造立されるなど、法隆寺では寺内僧らの努力によって霊場化が少しずつ進められていたことを考えると、法隆寺僧と興福寺僧との間には霊場化をめぐる軋轢があり、経尋の時代にまでそれが尾を引いて、先に紹介した上宮王院占拠事件へと発展したとも考えられる。

ただし、承德三年（一〇九九）、第一期に一切経を書写した法隆寺の頼円は、先に引用した聖霊院の院主顕真が記した『聖徳太子伝私記』によると、「康仁、慶好、頼円、増覚、覚印、智勝、隆詮、顕真」という形で、聖霊院の代々の院主へと連なる系譜に名前が挙げられている⁹¹⁾。しかも、この系譜の最初に記された康仁という僧侶は、法隆寺三綱のなかでも特に力を誇ったらしく、『法隆寺別当次第』の記事によれば、延清とともに金堂復興に名前の見えていた慶元や長好といった三綱僧たちも

また、康仁の一族であったことが判明する⁹²⁾。とすれば、法隆寺三綱のなかには興福寺に反駁する者もいれば、反対に興福寺と連携した者たちもいて、そうした後者のような僧侶たちの存在が、興福寺主導のもとで、聖霊院の造立や一切経書写が成し遂げられていく、その実質的な推進力となっていたのではないかと推察される⁹³⁾。奥書だけを読むかぎり、近親者の追善など、法隆寺一切経は聖徳太子に結縁を願った人々の願いそのものであったとみて過言ではないが、実はこの書写事業には割合早い段階から興福寺が関与していて、経尋の法隆寺別当就任と、聖徳太子五百回忌という契機を経て、聖霊院を拠点に法隆寺全体の再霊場化が加速度を増していくなか、法隆寺一切経はそうした人々の結縁の願いを結節点として、実際に法隆寺と周縁地域とをつないで喜捨を促す新たな仕組みとして機能した、と考えるべきであろう⁹⁴⁾。

平安時代、法隆寺は聖徳太子信仰の霊場としては四天王寺の後塵を拝していたものの、法隆寺で一切経が書写された前後の時期は、興福寺、薬師寺、さらには律僧集団といった寺外僧たちとの密なる連携のもと、衰微した伽藍が次々と復興を遂げていくひとつの画期でもあった。聖徳太子五百回忌に向けて太子信仰が一層の昂揚をみせていくなか、聖徳太子自身によって斑鳩宮近くに建立された寺という法隆寺の放つブランドの魅力が、複数の寺院からの僧侶の関わりを誘発し、それが結果として諸堂や法会の復興を促す土台を形成していた、と考えられる⁹⁵⁾。しかし、そのなかにあって、圧倒的な優位性を発揮したのは、やはり興福寺であ

る。ただし、それは単に興福寺が本寺としての立場にあったからだけではなく。おそらくは、法隆学問寺と上宮王院とを対置させることで、伽藍全体の霊場コンセプトを明確化し、顛倒した住坊を改造して聖霊院という新しい信仰拠点をつくるといった、トータルな復興ビジョンを興福寺が描きえたところに、他寺に抜きんでて優位性を発揮する機会を得たものと考えられる。そして、それは何より、興福寺自身、藤原氏の氏寺として、院政出現で強い危機感を抱きはじめて藤原氏との関係再構築という厳しい課題に直面していたことと連動している。⁽⁹⁷⁾おそらく、興福寺は、奈良時代以来、藤原氏が聖徳太子を特別に崇拜してきたことに着目し、太子ゆかりの法隆寺を末寺としてとりこみ、それを魅力的な霊場につくりかえることによって、自身の寺の付加価値を補完しようとしたのではなかっただろうか。⁽⁹⁸⁾史料的价值をどう考えるか。寺院史料の場合には、信憑性を問うだけでなく、時にこうした復興という視座で見直される必要があるものであり、実際にどのような形で人々のなかに信仰という新しい価値を生み出していくのか、寺院史料については、史実性いかに離れたところで成熟した議論をする段階にきていてのではないかと考えている。

〔註〕

- (1) 寺院縁起文に代表されるように、復興期に作成される文献は、過去の寺院の姿を描いてはいても、必ずしも史実に基づいた記述とはかぎらない。復興に向け、由緒という形であるべき姿を人々に示し、それを信仰の形成や喜捨に結びつけていくこともあったと思われる。関蔵の名は、僧徒に仏書を閲覧させる場として江戸時代に名古屋東御坊内に開設され、同朋大学の前身となった「関蔵長屋」に由来している。この「アーカイブス関蔵」は二部から構成される。ひとつは、本論で紹介しているような、史料画像とデータに基づく画像一体型データベースで構成される部分、もうひとつは、研究会報告、『紀要』掲載論文一覧など、研究所の活動内容を一覧として構成した部分である。

- (3) 現在、仏教文化研究所内には、過去三十七年間にわたる寺院調査のデータが蓄積されているが、現状、画像データ（資料写真）とテキストデータ（調査カード）とは別々に管理されている。それらを体系的に整理し、学術情報として学内外に発信していくためには、これらを一括のものとして研究の材として提供することが当研究所における喫緊の課題であり、そのための工夫として「アーカイブス関蔵」では画像一体型のデータベースの設計、構築を試みた。なお、この画像一体型データベースの基本的な設計は、工藤克洋（仏教文化研究所所員）が行った。法隆寺一切経だけでなく、将来的に研究所内に蓄積されている真宗史料の分析・整理をも見据えた形で、現在、適宜改変を進めている。

- (4) 同朋学園所蔵の法隆寺一切経の書誌データに基づいた分析、研究は、いずれ稿を改めて論じたいと考えている。

- (5) 同朋大学仏教文化研究所編『真宗連合学会第53回大会開催記念 真宗研究の先駆者 山田文昭コレクションの世界―特別展示― 真宗史料の世界―』（同朋大学仏教文化研究所、平成十八年）。

- (6) 平成二十七年（二〇一五）八月二十六日、正福寺に実際に足を運んで、山田文昭の墓碑など、同寺の文昭関係の史料について簡単な調査を行った。調査メンバーは以下のとおり。宮崎健司氏（大谷大学）、

- (6) 小山正文、工藤克洋、藤井由紀子（以上、同朋大学仏教文化研究所）。同朋大学編「東海印度学仏教学会 第一回大蔵会展観目録―夢白廬文庫本 法隆寺一切経―」（同朋大学、平成九年）。注（5）同朋大学仏教文化研究所図録。
- (7) 山田文昭『真宗史稿』（『山田文昭遺稿』第一巻所収、破塵閣書房、昭和九年復刊）。
- (8) 山田文昭『真宗史之研究』（『山田文昭遺稿』第二巻所収、破塵閣書房、昭和九年復刊）。
- (9) 山田文昭『日本仏教史の研究』（法蔵館、昭和五十四年）。
- (10) 山田文昭『日本仏教史の研究』（法蔵館、昭和五十四年）。
- (11) 注（5）仏教文化研究所図録。
- (12) そのほか、山田文昭氏旧蔵の法隆寺一切経は、住田智見氏の住寺であった熱田の祐誓寺にも寄贈されている。
- (13) 宮崎健司「法隆寺一切経と『貞元新定釈教目録』（伊藤唯真編『日本仏教の形成と展開』、法蔵館、平成十四年。後に『日本古代の写経と社会』に所収、塙書房、平成十八年）。
- (14) 同朋学園大学附属図書館「山田コレクション古写古版経典目録―法隆寺一切経を中心に―」（『同朋大学学報』第二十七号、昭和四十七年）。小島恵昭「蓬戸山房文庫所蔵古写古版経目録」（『東海仏教』第二十七号、昭和五十七年）。
- (15) 注（7）同朋大学目録。
- (16) 法隆寺昭和資財帳編集委員会編『法隆寺の至宝―昭和資財帳―第7巻』（小学館、平成九年）。
- (17) 伊東ひろ美「法隆寺一切経にみる『貞元新定釈教目録』―同朋大学所蔵本を中心に―」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』第二十一号、平成十四年）。
- (18) 同朋学園に所蔵される法隆寺一切経のうち、奥書のあるものは、十九点のうち十点であるが、次章で説明するように、一般に三つの時期に分類される法隆寺一切経書写事業の各期に照らしてみると、同朋学園所蔵のものは成立年代もばらばらで、全十九点は一括りとして塊をなすものではない。その意味では、当所蔵のものだけを分析しても、後述する法隆寺昭和資財帳の総目録や、大谷大学における一切経の統括的研究のデータにプラスできるような内容は期待できない。
- (19) 竺沙雅章「研究成果の総括」（竺沙雅章編『法隆寺一切経の基礎的研究―大谷大学所蔵本を中心として―』、平成8（平成10年度科学研究費補助金基礎研究（B）（2）研究成果報告書、平成十一年）。
- (20) 注（13）宮崎氏論文。
- (21) 同朋学園蔵『能断金剛般若波羅密多經』（法隆寺一切経データベース）、アーカイブス閲覧、同朋大学仏教文化研究所、平成二十七年。
- (22) 大谷大学蔵「十地論」巻十（法隆寺一切経、竺沙雅章編『法隆寺一切経の基礎的研究―大谷大学所蔵本を中心として―』、平成8（平成10年度科学研究費補助金基礎研究（B）（2）研究成果報告書、平成十一年）。
- (23) 年代的にみると、この行教は、宇佐八幡宮に参籠して、後に石清水八幡宮を勧請した大安寺行教とは別人である。
- (24) 長和元年（一〇一二）は十二月二十五日に改元されているため、正確には長和元年八月は存在しない。後に紹介する大谷大学所蔵の僚巻も、長和元年八月二日の奥書となっており、これをどう解釈するかは問題である。なお、改元年月日に誤りがあることは、小山正文氏のご教示によった。なお、小山氏の見解では、この経巻は長和元年当時のものではなく、法隆寺一切経の書写が始まって以後の写しではないか、とみる。すなわち、十二月に改元する新たな元号が八月の段階では書けるはずはないため、もともと底本に「寛弘八年」とあった表記を、後に書写された段階で「長和元年」に改めたものとして、当該経巻は後世に書写されたものであって、一切経の書写開始を八十年も遡らない可能性を考えておられる。
- (25) 堀池春峰「平安時代は一切経書写と法隆寺一切経」（『南都仏教』第二十六号、昭和四十六年。後に『南都仏教史の研究 下・諸寺篇』所収、法蔵館、昭和五十七年）。
- (26) SAT（大正新脩大蔵経テキストデータベース、<http://2l2d.klu-tokyo.ac.jp/SAT/>、大蔵経テキストデータベース研究会、CBETA経文検索、<http://www.cbeta.org/index.htm>、中華電子仏典協会、台北）。SAT

は『大正新脩大藏經』の第一巻より第八五巻までの全テキストをデータベース化したもの。CBETAは『大正新脩大藏經』の印度・中国撰述部等と正統藏經のテキストをデータベース化したもの。

林寺正俊「日本古写経データベースの構築とその意義」(『人文科学とコンピュータシンポジウム』、情報処理学会、平成二十四年)、仁野洋平・田中猛彦・張容・中川優・青木進・宇都宮啓吾・落合俊典「仏典画像閲覧のためのデータベースシステムの構築」(『情報知識学会誌』第一五巻第二号、平成二十四年)などがある。

今秋、「アーカイブス閲覧」の披露を兼ねて、同朋大学仏教文化研究所の主催で、「法隆寺一切経と書写者―経巻をいろんな角度で学んでみよう」(同朋大学仏教文化研究所、平成二十七年)という展覧会を開催した。展示ケース上の制約があり、実物の経巻は各巻とも二三紙程度しか展示できないため、「アーカイブス閲覧」のデジタル画像を補完的に用いて、観覧者には「経巻一巻まるごとを自由に見てもらう」形をとった。非常に実験的な内容の展覧会となったものの、意外にも観覧者が経巻の文字を通して、われわれと等身大の人の姿というものを想像しながら経典を見る、というケースが多々みられた。観覧者のほとんどは歴史的知識のない当学の学生や近隣の方々ではあったが、人間が書いた文字というものを介して千年以上も前に生きた人に向きあおうとする姿勢が見受けられたことは、主宰者として大変に興味深かったことをここに付言しておきたい。

堀池春峰「法隆寺一切経」(奈良六大寺大観刊行会編『奈良六大寺大観 補訂版 第四巻・法隆寺四』、岩波書店、昭和四十六年)。注(25) 堀池氏論文。

大屋徳城「法隆寺一切経の由来」(『性相』第二号、昭和三年)。大屋徳城「一切経書写勸進状」(東京美術学校編『南都十大寺大鏡 第七輯 法隆寺大鏡 第七冊』、大塚巧芸社、昭和八年。後に、「法隆寺一切経」として法隆寺勸学院同窓会編『日本上代文化の研究』所収、法隆寺勸学院同窓会、昭和十六年。さらに『大屋徳城著作選集 第九巻 仏教古板経の研究』再所収、国書刊行会、昭和六十三年。注(25) 堀池氏論文。

(32) 『大宝積經』卷第七十四「奥書」に「承徳三年^卯八月之比奉書寫了法隆寺結縁一切経之内宝積經七十三ノ并二卷僧頼円敬奉書寫之」とある(注(16) 法隆寺昭和資財帳編集委員会報告書「一切経」(一))

法隆寺一切経(重要文化財)4(24)。なお、この頼円は法隆寺蔵の『金堂日記』にもその名前が見えている(法隆寺蔵『金堂仏像等目録』『奈良六大寺大観 補訂版 法隆寺・第二巻』、岩波書店、昭和四三年)。頼円は、延清と同様、承暦二年(一〇七八) 法隆寺金堂の復興にも関わっており、翌年正月には金堂での吉祥御願に際して晨朝導師をつとめている。

(33) 林幸の第三次の書写勸進ははたして何時終了したか、現存する一切経の奥書では明確に把握できない。ただし、その勸進書写の伝統は相慶による『大般若經』の修理と補巻になって継続されたことが、堀池氏によって指摘されている。さらに、堀池氏は、元永元年(一一一八)十月の一切経開題供養以降、保安三年(一一二二)三月にいたるまでの四年間については一切経事業の空白期間であったとしていて、中絶理由については明らかではないものの、この期間は聖靈院が創建され、本尊として聖徳太子像および脇侍像五体も彫造されている時期であったから、寺家の関心は一切経書写勸進よりも、むしろ聖靈院創建に凝集化されていたとみて誤りがなく、とする(注(25) 堀池氏論文)。

(34) 宮内庁書陵部蔵『新撰字鏡』(京都帝国大学文学部国語国文学研究室『新撰字鏡』、全国書房、昭和十九年、後に臨川書店より再版、昭和四十二年)。昌泰・延喜年間(八九八・九二二)頃、昌住によって撰述された漢和辞書が『新撰字鏡』で、『類聚名義抄』とともに国語学資料として著名である。漢字の釈音、訓読について、日本人の努力が看取される点、国語史上その占める比重は極めて高いとされる。なお、この宮内庁書陵部の蔵本は、現存する『新撰字鏡』の最古の写本である(注(25) 堀池氏論文)。

(35) 山本信吉「法隆寺の經典」(法隆寺昭和資財帳編集委員会編『法隆寺の至宝―昭和資財帳― 第7巻』(小学館、平成九年)。
(36) 法隆寺蔵『大般若波羅蜜多經』卷二十四「奥書」に「承徳二年^{歲次戊寅}二

月三日壬午始書六月廿五日／^{壬寅}供養畢／願主法隆寺 前五師興円大
法師 ^{并尼寂妙日}／同三年二月廿九日校已」(注(16) 法隆寺昭和資財帳
編集委員会報告書、「二、大般若経 (三) 大般若経 (未指定 平安・
鎌倉時代) 170 (636)」。

(37) 山本氏は、奥書に基づいて、法隆寺前五師興円大法師と尼寂妙が願
主となり、承徳二年(一〇九八)二月三日から書きはじめ、六月二
十五日に供養、翌承徳三年(一〇九九)二月二十九日に校合したこ
とが知られるとする。なお、承徳三年の校合奥書があるものが、卷
第五十四、卷第五十八、卷第六十二、卷第八十六、卷第二百二十七、
卷第五百八十三と六卷あって、卷第二十四と一具の『大般若経』であつ
たことを示している(注(35) 山本氏論文)。

(38) 注(22) 大谷大学報告書。

(39) 宮崎氏は、第一期事業の基本台帳とみられる康和本、林幸個人の書
写蔵書目録で、事業最終段階時の書写整備台帳として活用されたと
みられる永久本、入蔵録を康和本によって補った大治本の三つに分
類している(注(13) 宮崎氏論文)。

(40) 大東急記念文庫蔵『大乘広百論釈論』卷十「奥書」に、「承和八年七
月八日／此是雖古書加法隆寺一切経蔵畢／以大治二年^{末丁}四月之比修治
之、静因之」とみえる『平安遺文』題跋編第三五号、東京堂出版、
昭和四十三年)。宮崎氏によると、これが古写経転用の経緯を唯一記
した史料であるという(注(13) 宮崎氏論文)。

(41) そのほか、法隆寺一切経に関する論文として、石井万紀子「天治本
新撰字鏡と法隆寺一切経の書誌学的研究」(『樟蔭国文学』第二八号、
平成三年)がある。ただし、既述の同朋大学関係のものは省く。

(42) 「僧林幸一切経勸進状(二卷)」(注(16) 法隆寺昭和資財帳編集委員
会報告書「一切経付属」、注(29) 堀池氏解説。

(43) 経源はもと興福寺の学僧である(後拾遺往生伝、「日本思想大系7
往生伝・法華験記」、岩波書店、昭和四十九年)。

(44) 注(16) 法隆寺昭和資財帳編集委員会報告書「二、一切経 (一) 法隆
寺一切経(重要文化財) 28 (177)」。

(45) 「紀姉子文書紛失状」(『平安遺文』古文書編第五卷二〇六八号、東京

堂出版、昭和三十八年)。

(46) 久野修義「中世法隆寺の成立と別所」(岸俊男教授退官記念会編『日
本政治社会史研究 中』、塙書房、昭和五十九年)。久野氏は、『别当
次第』に勝賢が後に二膳五師という地位にあったことや、『金堂日記』
に金堂堂司をつとめていたとあることに注目して、勝賢は聖と五師
という二つの要素が同一人格のなかに実現された存在であったとし
ている。『金堂日記』(注(32) 史料)。

(47) 『法隆寺別当次第』経尋条(『続群書類従 第四輯下 補任部』、続群
書類従完成会、昭和二年)。

(48) 注(47) 史料。『法隆寺別当次第』慶深条に、「不治。興福寺。承保
元年甲寅正月十四日任之。同廿五日印鑑承之」とあるのはその一例
である。ちなみに、印鑑とは公文書の入っている印蔵の鍵のことを
いう。

(49) 『徴古雜抄』所引「法隆寺文書」(『大日本史料』第三篇之十ノ七五二、
東京帝国大学史料編纂所、昭和十八年)。

(50) 注(47) 史料。「永久四年。上宮王院相論出来。寺僧暹尊伍師引率廿余人。
居住上宮王院致濫吹。三箇年既被停止院主隆嚴畢。本寺別当進退之。
追却暹尊等廿余人畢」とある。

(51) 『法隆寺別当次第』には、寺僧らが東院を占拠するに至った直接の原
因については何も記されず、推測に委ねるほかはないが、事件の当
事者が五師を中心とした法隆寺僧であつたことを考えると、興福寺
から僧がやってきて寺内の要職に就任する、という状況に対する反
発が寺僧たちの中にあつた可能性は十分に考えられる。

(52) 注(47) 史料。『法隆寺別当次第』には聖霊会料の寄進や楽人の来着
など、聖霊会についての事柄が記録されている。

(53) 「仏経并資財条(法隆寺東院資財帳)」(『法隆寺史料集成』1、ワコー
美術出版、昭和五十八年)。天平宝字五年(七六一)撰録とされる法
隆寺東院の資財帳で、奥書には、「此流記者院家規模也、紛失之後不
知幾年、于時保安二年三月廿六日、自從僧源朝之手始伝得之 田舎
小屋雑反古中散在云云、無翅飛无足歩也、悲喜相交感涙難禁者歟乞
寺僧院僧等固守護之重莫令紛失矣、別当長史少僧都法眼和上位経尋

(54)

敬以安置之」とある。なお、この記載から、本資財帳を後世の作成だとみなす見方もある（服部勝吉「法隆寺東院伽藍の創建計画意匠に就いて（一）」（四）、「歴史と地理」第二五巻第四一六号、第二六巻第一号、昭和五年）。

藤井由紀子「聖德太子信仰寺院の復活―本寺興福寺と末寺法隆寺」（『アリーナ』第五号、中部大学、平成二十年）。聖德太子の生誕五百年が強く意識された治暦五年（一〇六九）以降、法隆寺東院では法隆寺僧を中心に復興の動きを見せはじめたことや、別当経尋による東院掌握の状況について論じている。

(55)

俗別当の問題もあると予想される。法隆寺の場合、元慶八年（八八四）に諸寺とともに俗別当が任じられ、参議の藤原諸葛がこれに充てられていたことが知られる（『僧綱牒案』元慶八年（八八四）十一月十三日付、『平安遺文』第九卷四五四七号、東京堂出版、昭和三十九年）、『小右記』の筆者で知られる実資もまたその職に就いている（『小右記』長和四年（一〇一五）十二月十九日条、『大日本古記録 小右記四』、岩波書店、昭和四十二年）。法隆寺俗別当の実態は不明であるが、興福寺末寺である法隆寺にも藤原氏から俗別当が選ばれていたことがわかり、法隆寺の要職に興福寺から僧が次々と就任したこととあわせて、こうした俗別当の存在が、法隆寺の動向に大きく影を落としていたことも考えておかねばならないだろう。

(56)

『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』（『寧楽遺文』中巻、東京堂出版、昭和三十七年）。冒頭の縁起部に「奉為池邊大宮御宇 天皇并在坐御世御世天皇、歳次丁卯、小治田大宮御宇天皇并東宮上宮聖德法王、法隆寺問寺、并四天王寺、中宮尼寺、橘尼寺、蜂岳寺、池後尼寺、葛城尼寺^手敬造仕奉」とある。ただし、奈良時代における「法隆寺問寺」の用例はこの資財帳の一例のみという事情もあって、この点に着目し、場合によっては、これに疑問を呈する研究者もある。福山敏男氏は、疑問を呈しているわけではないが、何の必要があつて法隆寺という寺名に「学問」の二字を加えたかは不明だと述べている（福山敏男「法隆寺流記資財帳の研究」（『夢殿』第十二輯、昭和九年）福山敏男「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳の研究」（『日本建築史研究』

(57)

続編、墨水書房、昭和四十六年）。また、岡田芳朗氏は、「法隆寺問寺」という寺名は「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」以外では、十世紀半ばの「聖德太子伝暦」が初見であるが、それも巻末の「一書云」に登場しているのみで、六国史や成立の古い太子伝には見い出せないから、奈良時代に行われた呼称とは考えられないし、学問寺と名乗る由来も明らかではない、としている（岡田芳朗「古代の展開」、岡田芳朗ほか『日本古代史の諸問題』、福村出版、昭和四十三年。岡田芳朗「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」について、『女子美術大学紀要』第二号、昭和四十四年）。なお、これに対して、だからといって法隆寺問寺の称が八世紀中葉に存在しえないことの論証はなされていないとする見解もある（石上英一「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」の伝来」（井上光貞博士還暦記念会編『古代史論叢 中巻』、吉川弘文館、昭和五十三年。後に『古代荘園史料の基礎的研究 上』所収、塙書房、平成九年）。

(58)

法隆寺には創建以来の西院と、天平時代以来の東院とがあり、資財帳が別々に作成されていた点からみても、それぞれその場の果たす役割、および、その管理も異なっていたと考えられる。

(59)

荻野三七彦考定『聖德太子伝古今目録抄』上巻（法隆寺、昭和十二年）。

(60)

法隆寺が学問寺としての内実を伴うのは一切経書写以降のことである。これについて落合氏も、法隆寺の教学が歴史的にどのように展開してきたかは、中世の史料が消滅しているため不明としながらも、法隆寺には「所謂第二層の章疏集伝記類の書の書写記録や所蔵記録が殆ど見あたらない。法隆寺問寺と称されたことであるから、その内実を伴う章疏集伝記が蔵されていなければならぬ。一切経はどれほど所蔵されていたとしても、せいぜい經典本文の確定に供される程度であり、教学発展の本流とはならない。しかもその一切経すら法隆寺は遅くに所蔵するに至るのである。」（中略）第一層の一切経が平安後期になってようやく具備したことを勘案すれば、た

とえ法隆寺に法相教学の流行が見られたとしても法金剛院本ほどの内容を有する第二層の蔵書を有するまでには至らなかったと推測可能であろう」としている。落合俊典「興福寺と法金剛院の章疏目録」〔第4回国際研究集会報告書〕〔第4回国際研究集会「日本における宗教テキストの諸位相と統辞法」、名古屋大学グローバルCOE「テキスト布置の解釈学的研究と教育」、名古屋大学、平成二十年〕。

治暦五年（一〇六九）に聖靈會本尊のさきで造立された聖徳太子童子像は、俗形像としては聖靈院本尊のさきで造立された聖徳太子童子中世にむかつて人間の姿を写すことが不吉であるとして忌まれていた古代的な觀念から解放されて、人間の存在を視覚的にもとらえるようになってきた時代的風潮が投影されているのではないだろうか。法隆寺では、西院の金堂本尊である釈迦三尊像は、光背に「尺寸王身」と銘が刻されていることをもって聖徳太子の等身像として礼拝され、東院の場合は、夢殿本尊の観音菩薩像が、『法隆寺東院寶財帳』に「上宮王等身觀世音菩薩」と記されていることをもって聖徳太子の御影として信仰されている。

法金剛院蔵『大小乗經律論疏記目録』（七寺古逸經典研究叢書 第六卷 中国・日本經典章疏目録、大東出版社、平成十年）。

梶浦晉「法金剛院蔵『大小乗經律論疏記目録』について」〔七寺古逸經典研究叢書 第六卷 中国・日本經典章疏目録、大東出版社、平成十年〕。落合俊典「平安時代における入蔵録と章疏目録」（同上）。注（60）落合氏論文。梶浦氏は、書風よりみて、この目録の成立は平安時代前期、遅くとも平安時代中期と推定しているほか、大寺院の蔵書目録、もしくは蔵書整備のためにつくられた目録で、法相宗に関係ある人物によつて編纂され、法隆寺が興福寺の目録であった可能性を示唆している。また、『今昔物語集』などとの関連が指摘されている『金藏論』という類書も目録中には含まれているが、同書の写真が大谷大学（巻第一・巻第二）と興福寺（巻第六）に蔵されていることを梶浦氏は紹介している。なお、大谷大学蔵書は山田文昭氏の旧蔵書で、「法隆寺為令法久住利益人之」とあつて、もと法隆寺に蔵されていたことがわかる。また、興福寺のものは、『日本靈

異記』の紙背に書かれている。

注（63）史料「奥書」。梶浦氏によると、この奥書の伝領記は、上巻と下巻とでは奥書の筆は異なるが、上巻は法隆寺一切經の靜因の奥書と筆致が似ているという（注（64）梶浦氏論文）。また、落合氏は、この奥書について、「これは法隆寺の沙門延清が書写が終わってから一交、すなわち校正したとのことであり、さらにその書を五師靜因が伝領したという記録である」と述べている。注（60）落合氏論文。「前律師源義置文」「前律師道靜置文」（『平安遺文』一一五二号、『平安遺文』古文書編第三卷、東京堂出版、昭和四十九年）。これによつて延清は西別所の金光院三昧田の作人であつたこともわかる。この置文は、道靜が法隆寺西別所の三昧田を書き上げたもので、承暦二年（一〇七八）、法隆寺の地子、雑役が免除された際の作数が示されている。

注（67）「開浦院住僧解」（『平安遺文』一七四六号、『平安遺文』古文書編第四卷、東京堂出版、昭和三十八年）。

注（64）梶浦氏論文。ただし、落合氏は、延清について、「靜因の活動年代は12世紀初頭と判明しているが、延清については未詳である」としている。注（60）落合氏論文。

注（46）久野氏論文。法隆寺蔵『金堂日記』奉安置施入仏像并雜具等事条に、「四天王像并四鉢、延清五師奉安之」とある（注（32）史料）。久野氏によると、『金堂日記』は南北朝時代の書写とされる。その内容は、承暦二年（一〇七八）から延應二年（一二四〇）にかけて、法隆寺金堂内にある仏像雜具に関する八通の目録注進状、注文を書き連ねたもので、金堂の扉をかたく閉ざして礼拝讃仰の対象たるべき仏像を拝せないという、当時の法隆寺の危機的状況がうかがえる史料である。こうした状況下、延清五師は半夜導師として金堂内に四天王像を施入安置している。注（46）久野氏論文。

注（71）法隆寺蔵『寺要日記』（法隆寺史料集成）第六卷、ワコー出版、昭和五十九年。承暦二年（一〇七八）十二月八日に新造した毘沙門天、大吉祥天像の開眼供養がとりおこなわれ、翌年正月には金堂で吉祥

御願が修されたが、この吉祥御願をつとめた十人のうち、延清は半夜導師としてその名が登場する。

〔72〕『金堂日記』所収「法隆寺政所注進状」承暦二年（一〇七八）十月八日付（注〔32〕史料）。承暦二年（一〇七八）、別当能算と法隆寺三綱が注進条を提出して、別当遷替時しか開かない金堂の扉を開いて仏事を修し、そのために新たに金堂堂司を任じて管理にあたらせただけ、金堂内に新造の仏像を納めるなどの改革を試みていたことが、この史料からわかる。

〔73〕『薬師寺別当次第』（『東寺文書』甲号外二八号、『校刊美術史料』寺院篇中巻「薬師寺史料集」、中央公論美術出版、昭和五十年）。永承四年（一〇四九）五月二十八日、道静は薬師寺別当に補任されている。

〔74〕注〔67〕史料。道静については、以下の論考がある。小島恵昭「別所の展開と聖の宗教活動―法隆寺西別所金光院「聖」律師を中心として―」（『同朋学園仏教文化研究所紀要』第二号、昭和五十五年）。注〔46〕久野氏論文。

〔75〕法隆寺蔵『無量義經』奥書に「奉為五師澄□大法師尊靈□□生死往生□□依存生之所願、所果遂／没後來善而已、永久二年甲午四月二十九日、筆師僧靜因敬白」とある（注〔16〕法隆寺昭和資財帳編集委員会報告書「一、一切經（一）」法隆寺一切經（重要文化財）12（111））。法隆寺蔵『如実論反質難品』奥書（注〔16〕法隆寺昭和資財帳編集委員会報告書「一、一切經（一）」法隆寺一切經（重要文化財）90（354））。「法隆寺一切經論内、五師大法師靜因所奉書写也／願以此善根、自他開慧眼耳／大治二年_末二月二十八日敬奉書之」とあり、追善供養ではなく、学問的な関心に書写目的が移っていて、堀池氏の指摘したとおり、第三期の一切經書写事業の方向性に変化が出ていることがうかがえる。学問目的という点では、靜因は天治元年（一一二四）の『新撰字鏡』巻一の書写校合を林幸らとともに担当していたこともわかっている（注〔25〕堀池氏論文）。

〔77〕注〔60〕落合氏論文。氏は法金剛院への伝来について、「法金剛院の川井戒本住職によれば、詳しいことは不明としながらも明治の廃仏毀釈以降南都の寺院と法金剛院を兼帯した住職もいたことから伝

わったのではないだろうかと推測されていたのであるが、とまれ法金剛院本は元來法隆寺に所蔵されていたことは重要な事実であろう」としている。

〔78〕『法金剛院古今伝記』導御伝（『法金剛院文書』一、東京大学史料編纂所架蔵影写本、第一五丁裏、『嵯峨清凉寺地藏院縁起』、文永八年（一二二一）八月一日付「釈迦堂大念仏縁起」（以上は大覚寺史資料編纂室編『大覚寺文書』上巻、昭和五十五年）、「律苑僧宝伝」導御伝、「招提千載伝記」（以上は『大日本仏教全書』第一〇五巻・戒律伝来記、仏書刊行会、大正四年）などに見えるが、夢殿參籠の目的は衆生済度のほか、生き別れた母への邂逅を願ったものだとあるなど、多分に縁起的要素が濃いものである点、注意を要する。

〔79〕「法隆寺西室第九柱底面銘文」（高田良信編『法隆寺銘文集成』上巻、国書刊行会、昭和五十二年）。

〔80〕「法隆寺食堂薬師三尊像厨子墨書銘」（高田良信編『法隆寺銘文集成』上巻、国書刊行会、昭和五十二年）。文永五年（一二六八）十二月、食堂塑造の薬師三尊像を修理して、厨子を作っている。「寺要日記」文永八年（一二二七）十月八日条、注〔71〕史料。文永八年（一二二七）には東院舍利殿において逆修の仏事を行っている。「法隆寺新堂院棟札」（高田良信編『法隆寺銘文集成』上巻、国書刊行会、昭和五十二年）。弘安七年（一二八四）に新堂院棟上の勸進を行なっている。細川涼一「法金剛院導御の宗教活動」（『仏教史学研究』第二六巻第二号、昭和五十九年。後に『中世の律宗寺院と民衆』所収、吉川弘文館、昭和六十二年）。導御は唐招提寺中興第二世長老の証玄に具足戒を受けて出家しており、唐招提寺系律僧の祖とされる著名な覚盛の孫弟子にあたっている。

〔81〕頭真「聖德太子伝私記」下巻（荻野三七彦考定「聖德太子伝古今目録抄」、法隆寺、昭和十二年）。鎌倉時代の聖霊院では、院主頭真が叙尊ら、西大寺系の律僧と提携して、調子丸信仰という従来にはなかった新しいタイプの信仰を形成しながら諸伽藍を再建していったことが跡づけられる律僧と連携した頭真の活動については、下記を参照のこと。藤井由紀子「中世法隆寺と聖德太子関連伝承の再生

―法隆寺僧顯真と調子丸、法華山寺僧慶政と太子御影―（佐伯有清編『日本古代中世の政治と文化』、吉川弘文館、平成九年）。

〔83〕『東大寺円照上人行状』（『続々群書類従』第三輯「史伝部」、続群書類従完成会、昭和五十三年）。

〔84〕注（81）細川氏論文。細川氏は、律僧円照の譲りを承けて法隆寺東院の律家を管掌した円覚上人は導御のことで、法隆寺東院再興を担った北室の、事実上の最初の長老だと評価している。細川氏によれば、文永八年（一二七一）三月、導御は東院舍利殿において逆修の仏事を運営しており、鎌倉時代末期の覚円房乗海、南北朝時代の禪觀房叔実の時期には、北室長老が毎年十月八日に主催する年中行事と化している。

〔85〕細川涼一「中世の法隆寺と寺辺民衆 勸進聖・三昧聖・刑吏」（『部落問題研究』七十六輯、昭和五十八年、後に『中世の身分制と非人』所収、日本エディタースクール出版部、平成六年）。壬生狂言は導御に始まるという伝承もある。

〔86〕注（81）細川氏論文。

〔87〕注（60）落合氏論文、注（64）梶浦氏論文

〔88〕注（60）落合氏論文。

〔89〕目録の校合が行われた延清の時代は、興福寺だけでなく、道静とのつながりに代表されるように、薬師寺との関わりも深い。たとえば、山本信吉氏が、具体的な内容は未詳ながら、法隆寺一切経事業が興福寺とともに薬師寺の協力関係のもとに進められたことを指摘して、薬師寺の經典がテキストとして利用された可能性に言及していることは留意され、興福寺以外の目録である可能性も十分に考えられる。

〔90〕注（35）山本氏論文。

〔91〕注（47）史料。『法隆寺別当次第』能算条に、「別当大威儀師聖靈会二箇度被供養之也。此時寺僧等背別当。成十二箇條奏状訴申之」とある。また、この能算の時に、東院の創建者である行信と修造者である道詮の像が夢殿内壇上に遷されているが、これもまた東院の霊場整備の一環だと考えられる。

〔92〕顯真は聖靈院を拠点に、調子丸の子孫という独自の信仰を展開して、

鎌倉時代の法隆寺の伽藍復興を精力的に進めた僧侶で、この系譜も「調子丸系図」と呼ばれている。注（59）史料、注（58）荻野氏著書。林幹彌「太子信仰の研究」（吉川弘文館、昭和五十五年）。

〔93〕注（47）史料。

〔94〕康仁一流と勝賢との関係については、現在のところ結びつけるような手懸かりはない。

〔95〕法隆寺一切経の黒方印は、聖靈院や鎌倉時代に聖靈院の院主として精力的に法隆寺復興を成し遂げて行った顯真得業の黒方印と似ている、という指摘もある（注（27）大屋氏論文）。

〔96〕注（54）藤井論文。藤井由紀子「聖徳太子霊場の形成―法隆寺・四天王寺と権門寺院」（吉田一彦編『変貌する聖徳太子―日本人は聖徳太子をどのように信仰してきたか』（平凡社、平成二十三年）。

〔97〕日下佐起子「平安末期の興福寺―御寺觀念の成立―」（『史窓』第二八号、昭和四十五年）。日下氏によると、院政という政治形態が出現し、藤原氏の権勢に翳がさしはじめたことで、氏寺としての興福寺に対する期待が急速に高まり、氏寺としての存在意義に再び注目が集まるのがこの時期で、藤氏長者以下、氏族のための祈請が盛んに行われたほか、氏族の「御寺」とまで尊称されるように一変したという。また、そのかつてない顕著な状況は、覚信という僧が、興福寺の別当職に就任したことで拍車がかかっていく。この覚信は藤原師実の子息で、藤氏長者の血縁者が僧として興福寺に入り、僧としてはじめて別当職に就いたことで、この寺と藤氏長者との結びつきは大いに深まることになった。特に、康和三年（一一〇一）、弱冠二十歳そこそこで新長者となった忠実（覚信の甥）と覚信との連携はめざましく、忠実が主導して南円堂で盛んに祈禱を行なう様子が、日記類には少なからず書きつけられている（『中右記』嘉承元年四月二十九日条、〔殿曆〕嘉承元年四月十三日条、天永四年七月四日条、『永昌記』天仁三年三月六日条。さらに、忠平や道長らによって、法性寺や法成寺など、新しい氏寺とされてきた諸寺院が、天台宗における山門派・寺門派の諍論の具とされ（平岡定海「藤原氏の氏寺の成立について」、『日本寺院史の研究』、吉川弘文館、昭和五十六年）、その役

(98)

割を果たさなくなっていたことも、こうした状況に影響を与えたかもしれない。いずれにせよ、興福寺は藤原氏繁栄のピークを過ぎてようやく、藤氏長者の庇護のもと、名実ともに氏寺として機能するようになったのである。十二世紀は興福寺にとっても大きな転換期にあたっている。

注(54) 藤井論文。外戚という形で皇族とつながり、天皇の大権を代行する実質的な最高権力者として摂関の地位に就いていた藤原氏は、同じく摂政の地位にあった太子を摂関家の守護者として特別視していた。したがって、興福寺はそのような藤原貴族の意識を巧みに利用しながら、中世に向けて氏寺として再霊場化を図っていたと想像することができる。能算や経尋ら、興福寺から有力僧が法隆寺別当に就任することになったそこには、法隆寺のような寺院を末寺として傘下に取りこみ、その霊場化を促して、自己の寺と補完的な形で機能させていくことで、自身を藤原氏の氏寺として霊場化の方向性を強化しようとした興福寺の意図があったものと考えたい。

〔謝辞〕

本論文をまとめるにあたっては、大谷大学図書館に蔵されている法隆寺一切経の閲覧が不可欠であったが、さまざまな教示も含めて、大谷大学の宮崎健司氏には大変にお世話になった。心から感謝の意を表したい。また、同朋大学仏教文化研究所の所員であり、大谷大学講師でもある工藤克洋氏にも、法隆寺一切経の基礎調査からデジタルアーカイブスの構築に至るまで、多大なるご協力を賜った。同僚ではあるが、深謝の意をもってここに付記しておきたい。

[illegible]

德政周聞咸稱其用後學之以觀心乎
上佳盡四賦未竟意欲舉孤松宿雪度飛
蓬開生地驚妙外空入上元宮星斗散燦
耀成朱閣百重雲曙晴而雨而無與爭芳
詞亦云歌慶環八水曲金風庭亮曉蟾蜍
奇作典長至至於先皇受身秋光將陳蹟
妙則精巧更第一兼之律之直馳驟於心也
八歲三區之久收壽祚以爲後自可應之間
總將三載學文凡六百六十七紙筆市十卷
宮佛琳瑯引慈室於西掖注法而於佛堂聖
藏或時傾金書士罪不至極溫大宅之風談
於休迷速別愛水一畝波回跡收岸之慈惠
因業盛養以緣界泮檀之歸推人而記贊又
桂玉馬藏雲窗方得沾花連出詠飛燕喜
不庭汗朱衣連往日理中桂蘭本貞品高
間有馬則駿物下莊果而邊育洋明燭不
能追夫以有才不知倚蒼香而以嘉謨平人
倫有識不辭廢卻未愛力異茲徒然免時口

皇太子居處述 霍北

月毛乞丐斯福誕興與乳坤而永大

之煥發仁教非暫已以萬民之蒙開誠言非
賢矣莊之其可益具如聖威敢請法之本宗
災紐之飢賜也綿祐宏主嗣而經乘抑登有
二萌故振生風之協梁調度直暢年七分宋
充丹歷之煥彩焉感之首莫測具勝欲望
慈而報來毛玄亦不敢執乾而致等尤恩而
下明聖性朝之綱紀六及之正教使行前之
垂火結三載之秘笈是以始乞異命安樂
且无枝節未固通流集惠惠坐而鎮常靈威
應身經歲劫而不朽最難之符文二奇符警
峯塔口法臨轉變轉化無窮都空高寂靜
室而六龍叱野會林些天光而合氣伏惟皇
帝陛下 上玄寶誼恭指而泣八蒸便祝
然聚絳冠別分圓量加符咒至孝外
著之文字及此盛金道而統統之傳蓋漢同

【口絵】法隆寺一切經のうち『能断金剛般若波羅(蜜)多經』長和元年(一〇一二)八月十九日 僧行教書写

是實有者休不應視為戲論所以為何如
未說此戲論即為非戲故名戲論如未說
三十六世果即非世界故名三十六世果
何以欲世尊蓋世界是實有者即為二戲
執如來說一合執即為非執故一合執併言
事觀此一合執不可言說不可斷論然以一
邊失與生機執是法何以故喜現法便是言
如來宣說執是有情見命者見亡是補特
伽羅見意生見牽鋼婆見位者見家有親族
以意云何如來而說為已證不喜現法言不
不也世尊不也喜現如是評說非為已證所以
者何如來而說執是有情見命者見亡夫
見神特伽羅見意生見牽鋼婆見位者見
者見所為非見故及教見乃至受者見
佛告喜現諸有欲遊蓋護者有一切法
應如是知應如是見應如是信解如信得獲
何以故喜現法想者如來說為非得是
故如來說及法得法想

復次喜現法若諸摩訶薩以元量敬世界
威德亡寶奉禮如來應已尋覺有量男子
或善女人於此報若波羅密支經中乃至自
愧他受持讀誦究竟通切如理住意久廣
為他宣說開示由此因緣所生福聚甚多利
前元量元數本何為他宣說開示不如不應
說開示故名為宣說開示今時世尊而說

闍曰
諸般所為如星翳燈幻露沍勢重重俱觀
時薄伽梵說是經已尋者喜現及諸花曼
鬘尼耶波索迦散波野迦并請也問天人何素
浴健遠跡并開時伽梵可說經已見是歡
結信受奉行

非斷金剛般若波羅蜜經

長和元年
子八月六日
信行教
言

一切經
法隆寺

他受持讀誦究竟通切如理住意久廣
為他宣說開示由此因緣所生福聚甚多利
前元量元數本何為他宣說開示不如不應
說開示故名為宣說開示今時世尊而說

闍曰
諸般所為如星翳燈幻露沍勢重重俱觀
時薄伽梵說是經已尋者喜現及諸花曼
鬘尼耶波索迦散波野迦并請也問天人何素
浴健遠跡并開時伽梵可說經已見是歡
結信受奉行

非斷金剛般若波羅蜜經

長和元年
子八月六日
信行教
言

一切經
法隆寺